

大連往来

横山邦治

○昨夏（平成九年八月末日）から中華人民共和国の北の窓口とも言える大連を、しばしの余生を送る地と決めました。日中技能者交流センターからの派遣という形で、外国人専門家という資格を得て、大連外国語学院の日本語の教師ということになったのです。この派遣資格を得るためには、センター主催の一ヶ月余りの合宿研修を受講しなくてはならず（私自身は一応受講免除となりましたが）、それは一寸屈辱的という感じもあつて一瞬躊躇ったのですが、文教を辞することによって一度初心に帰って人生の再出発をする覚悟をしていましたので、過去の虚飾の自恃心を振り捨て、センターの世話になることを決心したのでした。合宿（研修所は愛知の西尾市にあります。西尾市は大給松平氏の城下町で、その面影が濃く残っている町なのですが、私にとっては思い出の強い町なのです。西尾市には、岩瀬文庫があつて、大学の四年生の夏、一週間ばかり八文

字屋本調査のために通ったところなのです。私の近世文学研究の出発点とも言える文庫なのですが、その後は一度だけ立ち寄ったぐらいでした。この研修の機会に再訪して、馬琴の自筆稿本である『犬夷評判記』などを見たことでした。西尾市は、私にとって二度の人生の出発点となった町として忘れ得ぬ町となるでしょう」というのは一寸辛抱できないかなと思つて西尾駅前の安ホテル住いをしてまして、中途半端な研修を受講したのでした。どうもこの研修というのは子供騙しという感じのもので、受講生の皆さん（高校や中学の教師を永年勤務して定年退職した人たちが過半で、第二の人生を中国での日本語教師として献身しようと考えておられる有志の方々でした）にとつては、何とも頼りない研修内容ではないかと思つたことでした。それはともあれ、私も一応終了証書を授与されて有資格者ということになり、三十数年来考え続けてきたことが実現できる運びとなったのでした。

大連外国語学院に受け入れていただく資格が出来たということになったわけですから。最初、大連外国語学院の徐甲申副院長に大連駐在の素志を申し上げた時は、簡単に交換教授的に受け入れてもらえるぐらいに考えていましたので、至極考え方が甘かったということなのです。世間の風は厳しいものなのであります。○三十数年来考え続けてきたというのは何かと申しますと、随分昔のこと、九州大学の村幸彦先生の研究室に隔週ぐらい通つていたころのことなのですが、私が読本の存在を求めてあちこちの図書館めぐりをしていることを御承知の中村先生が、戦前に大連高商の教授であられた重友毅先生の伝聞として、大連高商にも出来のいい読本が相当数蔵されていたということですよと話して下さったのでした。当時中国は遠い遠い国でしたから、毛沢東の「矛盾論」とか「実践論」とかは読んでいても、とても渡航できるところではなかったのですが、それに政治音痴ですから日中間の未来予想など出来るはずもなく、ただ何となく読本があるのなら大連に行つてみたいなアと思つたのでした。こんな夢のような話ですから平常時には脳裏から消えているのですが、読本調査のために文庫などを訪れるよう

な時には、基調音のように大連の話を想起するのでした。十年あまり前、文教が大連外国語学院と姉妹縁組を結ぶという話の時も、日本語を日本人と同じように話される徐甲申先生に「大連にあるはずの日本の古書籍」について質問攻めにする始末でした。しかし徐先生を含め中国の先生方は、そういう方面に当然のことながら関心も薄く知識もあまりお持ちではないようでしたが、もし大連に行くことが出来たらあれこれ案内はしていただけたという感触は得ることが出来ました。基調音が突然現実味を帯びてきて、夢が何か実現してくれるような心躍る想いを抱いたことを想起します。

○文教に在職中、書道専修生の中国金石研修旅行に随行という形で、二度ほど大連に行きました。二度目は大連に行つてとんぼ返りということで、随行とは申せ、「大連にあるはずの日本の古書籍」探索という目標が露骨な随行でした。最初は徐甲申先生に案内されて、大連図書館に参上しました。大連図書館には旧満鉄図書館の蔵書類が蔵されているらしいということが、そのころにはおぼろに判つて参りまして、徐先生に強請してお連れいただいたのでした。館長さんらしきで紹介してい

ただし、徐先生の通訳で口上を述べたのです。が、隔靴搔痒であります。党の人らしくて、役人的雰囲気の人でしたが、徐先生が色々と周旋して下さったのでしよう、とにかく書庫に入れていただくこととなりました。ここまでは一人で監視付きでありましたが、何層かある書庫の二層分を見ることが出来ました。六層と七層です。停電中で、薄暗がりの中を時間には迫られて走りながら一応隅から隅まで目を走らせたのでした。膨大な蔵書です、それが敗戦後五十年間、ほとんど手付かずで眠っているという感じがです。日本の殖民地政策の尖兵だった満鉄ですから、中国の満蒙関係を中心とした歴史地理の諸資料が数多く目に付きましたが、とにかく広い書庫の隅から隅までビッシリ和漢の書が並んでいるのは壮観でした。ただ私の興味のある古書（古い時代の写本とか江戸時代の板本とか）は寥寥たるもので、中村先生の伝聞のものは見当りませんでした。六階と七階の上に更に二層の書庫があるので、時間もなくて見学は禁止という感じで心を残したことでありました。が何か心の残ることでしたので、中国語で申せば本当の意味で「再会」を念じたことでした。二度目も徐先生にお連れいただいたのですが、

高曉華さん（注二）が御一緒にしてくれましたので、書庫は二層分しか見られませんでした。が、目録のカードを見させていたでいて、司書の方と話すことが出来ました。高さんの通訳による会話ですから不十分なことが多かったのですが、次のようなことがおぼろに判つたのでした。（一）日本の敗戦後、満鉄の図書は中国側に引き渡されたのですが、大連ではソ連進駐、国共内線、文化大革命という三つの危機があった、一番大変だったのはソ連進駐で、次が文化大革命だったというのです。文化大革命のことはあまり具体的には語りたくないようでしたが、ソ連進駐の時のことは憎しみを込めて生々しく語ってくれました。満鉄の線路を枕木まで強奪していったというのです。本は無智な奴等だから手を付けなかったというのです。ここで満鉄の図書は基本的に封印されてしまったのです。他見を許さずです。文化大革命の風は、封印されていた故に、紅衛兵の攻撃を免がれたようでありました。文化大革命は基本的に焚書坑儒ですから（今の中国で文化大革命のことを、かつての朝日新聞などの報道のように肯定的に語る人は皆無と言ってよいと断言できます。責任ある地位に居る人は、肩をすくめて黙して語らずというところはありま

すが、私が接した限りにおいて極めて否定的です。被害者が実に多いのです。そして紅衛兵だった人たちのリーダーが、勉強出来なかったことを後悔し、文化大革命の愚を口を極めて否定するのを一度ならず聞いたことです。イデオロギーの無謬性を信じることの結果の政治的刻薄さというものを、今更のように思い知ったのです。二十世紀はそういう意味で主義に振り廻された世紀であったのかも知れませんが、帝国主義と共産主義との、大変なことであつたようですが、封印されたまま埃の中に忘れられていたようでした。(二)

この数年、日本の研究者が調査のために訪れるようになったともいいます。その時に聞いた大学名は、東大・早大・京大・龍大・九大といったものでしたが、具体的には判りませんでした、どうも近代史の研究者が多いような話でした。皆さんが蔵書の内容に感じして、今後の調査・研究の援助を約束して帰られるが、まだそれが果されたことはないという話でした。これらの話は老令の男性の司書らしい人の語りだったのですが、カードを見せていただきながらの雑談的な語りなので、いくらか散漫な印象でありながら真実性を帯びた感じでありました。ところでこの二度目の訪問でも二層の書庫には入れてくれました

が、その上の二層の書庫の中には雑資料だと言つて入れてくれないうのです。何か判らないが見てみたいという思いは、心の底に沈澱したことでありました。高曉華さんに今後十分に調査して下さいとお願いして、大連図書館の二度目の訪問は終了です。

○文教を辞すことを心に決したころ、岩波の新古典の『開卷驚奇俠客伝』を担当してみないかという話しが舞い込んできました。学長職を続けるのでしたら当然辞退すべき事柄でしたが、学長職を辞するのは既定のことでしたから支障とはならなかったわけながら、大連行きも秘かに心に決めていましたので(具体的には何もなく、徐甲申先生に自分自身の希望を伝えていただけ、何の約束も成算もあつたわけではありませんでしたが、中村先生経由の重友伝承確認のために渡海することは動かしがたい決意となりました。この決意は極く親しい一二の人にしか洩らしていませんでしたが)、さて大連に行つて『開卷驚奇俠客伝』のような長大作の校注が可能かどうか悩んだことでしたが、校注協力者をお願いしたらどうかと考へ始めまして、私自身は大連で校正に専心してみたらとも考へ、協力を依頼した方たちからも応諾の御返事がいただけるということ

で、前向きの返事をしたことでした。そしてその後は一意専心文教における跡始末と校正『奥の細道行脚』の校正です、私の文教に於ける足跡の一つという考へがありましたので、この出版と文教を辞することを一致させたかったのでした)とに従いました。

○文教を辞退して改ためて徐甲申先生や高曉華さんと連絡をとり、いくらか自負心の鼻柱を折られながら日中技能者交流センターの日本語教師の資格を取得することが出来て、大連に渡つたことでありました。ここで驚いたことは、大連行の決意を打ちあけた時、家人をはじめ妹や弟たちも友人たちも、一人として賛成してくれた人がいなかったという事実です。殊に今更のごとく吃驚して自省したことは、妹たちが言った「兄さんは今まで一人で生活したことはないはずで、異国での自炊生活に耐えられるのか」という言葉でした。事実、鈴張という在所に生まれて、長男死没直後に生まれた次男ということもあつて猫かわいがりされ、長男意識を助長された上に、我が家の遺伝病のように恐れられていた結核菌に冒されて腺病質な子というので過保護となり、中学では一年以上寮生活をしましたし、高校・大学では下宿生活をしたのですが、何

時も弟や妹と一緒にであったりで一人の自炊生活という経験がほとんどないことに気付いたのです。鈴張の生家にこだわって、基本的に鈴張を離れられない生活を送っていたわけで、そんな人間が人生の終焉に近付いて異国に生活するなど言い始めるのは狂気の沙汰也と、日ごろの生活態度を知っている血族の者は思ったでしょう。そう言われてみると正にそうなのであって、C型の血清肝炎という持病を持っていて強健とは誰が見たって言えない体力で、不衛生で寒冷という先入観のある大連というところで、生きて行けるはずがないというのが、友人を含めた周辺の人たちの見方だったのです。事実、これまでの二度の大連行では、二度とも下痢という生理現象に苦しめられましたし、殊に最初の時には経験したことのないような新幹線のぞみ号の下痢に見舞われ、閉口頓着いたした次第でありましたので、私自身にも不安がないわけではありませんでした。しかし当時の私には日本を捨てて大連に流亡することに救いを求める衝動のごときものがあつて、身内の者や友人たちの忠告を振り切る行動に出る外なかったようです。あのころはとにかく日本を離れたかったと言つてもいい気持だったのだでしょうが、さ

て大連生活を始めて最初の国際電話は、中学時代からの親友のもので、「意地を張るなよ。少しおかしくなったらすぐ帰れ！何時でも迎えに行つてやるから」という内容の言葉でした。そのころはそろそろ下痢が始まっていたが、それは覚悟の上のことですから我慢できたのですが、一週間もしない間に腰痛と下痢の合併症が始まったのは困りました。赴任した大連外国語学院は、西本願寺大連別院の跡地に建っているのですが、大連の中心部である中山広場から歩いて二十分ばかりの丘の上に位置し、とにかく石段の多い大学なのです。恐らくその石段の昇降を慣れるためと思つて一日に何度も昇り降りしたのが発火点だと思つたのですが、発熱を伴う腰痛となつてしまいました。これはやや悲惨な状況でありまして、下痢というのはトイレに行く回数が増えるのは当然ですが、ベッドから起き上るのに腰に激痛が走るのですから、しかも密室に一人で閉ぢこもっているのですから、実際冷汗を手に握りしめながらのトイレ行と相成りました。瘦我慢の哲学で、入学式の来賓あいさつも冷汗流しながらこなしただけですが、当時の蒼白で苦痛に歪んだ顔を見ていた同僚の日本人教師の間では、すぐ白旗を上げて日

本に逃亡するであろうというもっぱらの評判だったそうです。今までも逃亡者の例が一二あつたそうですから、そういう落伍者の最有力候補であつたようです。最初自炊の出来ないホテル住いでしたし、ベッドもフワフワの上等のものでしたから、少々汚なくても我慢するからと自炊の出来る宿舎に替えてもらつて、ベッドも撤去してもらつて床の上に絨敷敷いてベッドの代用として、何とか食生活と寝る生活の改善をはかったのですが、腰痛の方はとんと治る気配がありません。実は一昨年父が亡くなった直後ごろに、文教を辞す準備のために本の整理をしていてギククリ腰状況になり、従来の按摩や電気治療ではどうにもならなくて、ブロック注射をしてもらつて急場をしのいだことがあるのですが、その時のペインクリニックのお医者さんが、一応これで治まると思うが、今度再発したら手術した方がいいでしょうと言つていたことが耳に残つていて、二十年近く前の大手術を今一度受けるのは厭だなと思ひながら、これは友人の言葉どおりに意地を張らずに日本に逃げ帰るのが正解かなと二週間目ぐらいには考え始め、家人に迎えに来てもらうかも知れないと電話したりしていました。しかしこのまま尻

尾を巻いて日本に逃げ帰ったというのでは、本探しという重友伝承探究という表向きの目的も未完で終わりますし、しばし日本を離れていたいという私の衝動にも反するしと思ひ悩んだのですが、身体(注二)がついていかないとするのは仕様がなと諦めかけていたのです。そんな状況の時に、郷に入れば郷に従えという諺もあると考え始め、強ミノ注射をしていただいていた看護婦さんに相談したところ、中国武鍼・火瓶・按摩をすすめられて、心理的抵抗感は相当にあったのですが（大学医務室は内科・外科・歯科など揃っていて大組織なのですが、施設は敗戦直後の不衛生な医務室のごとくで、それだけでも心理的神経的に参ってしまいますので、直接施術を受けるには相当に飛び越えなくてはならないものが多くあったのです）、とにかくこのままではどうにもならないので、中国式医療に従ったのです。ところが一週間ばかり経つ間に薄紙をはがすように痛みがなくなり始め、同時に身体が慣れてきたせいか下痢も止まり始めたのです。一ヶ月あまりの地獄の日々が嘘のように消え去り、いくらか人間的な生活が営まれるようになったのです。そのころ按摩の女先生（日ごろは病院勤めをしておられる方で、土日の休日だけ按摩の

施術をして下さるのです。この先生は氣功術を体得している人らしく、あまり力を入れておられないようなのに、極めて身体に響く按摩です）が、確か五回目ぐらいの施術の時だったと思うのですが、足の中指の根元をグリグリ揉まれて苦痛で飛び上がった時に、貴方は肝臓が悪いので、これからは腰と肝臓の治療をすると言われて（通訳付きです）吃驚仰天、こちらで按摩の女先生の信者になり始めたのです。

○十月ごろ肝臓病患者の全国大会が広島市で開催されることになっていましたので、広島代表として挨拶するように言われていて一時帰国したのですが、当然のこと病院で肝臓の数値の血液検査したことでした。その結果はGOT・GPTという数値が、罹病以来初めてという平常値になっていて、主治医の先生にも思わず按摩の効用ではないかと口走って了って、全否定されたのですが、私にとりましては按摩の女先生が神様のごとき存在になっていったのです。中国での生活が基本的に快適な状況になっていったのは、この中国式医療のおかげでありまして、中国五千年の歴史の知恵を享受したという思いがありました。一回の施術に八十元必要でありますので、中国で支給されている給与の大半は消え

てしまいますので、日本からの送金に依存せざるを得ず、マスオさんの状況は一層鮮明であります。中国に行つて実感したのは書物が安いということでした。身体(注二)の調子がよくなつて参りますと、足腰の強化のために規則的に散歩するようにと言われていましたので、中山広場までの往復（約六千五百歩）を日常の習慣としたのですが、中山広場から少し足を伸ばすと大連一の繁華街である天津街に新華書城がありまして、北京や天津の書籍に比べると規模が小さいのですが、まあ相当数の本がありますので、ついつい足が向いてしまうのです。少し遠くの三八広場の方まで足を伸ばしますと文海書市という新本の安売り市場もあります。日本の古本屋と言えるものはありませんが（北京や天津や上海にはあるようですが）、それは文化大革命の嵐が本を焼亡して了つた結果かも知れませんが、新本の安売り市場はあるのです。日本と違って本の定価というものにもあまり権威がないようでもあります、日本の悪評高い再販制度が中国では制度化されていないのでしょうか。ともあれ散歩ついでに書店に寄りますと、索漠たる専家楼の部屋を思い出し（日本から極く手廻りの辞書類と講義に使う予定の奥の細道と唐詩選に関

連する資料ぐらいいしか送っておらず、何となく心淋しい状態なのですよね、ついつい本に手が出たのです。勿論中国の書物を読むことは出来ないのですが、基本的な四書五経類と二十五史は揃えるとして、とにかく清代以前の白話小説類は出来るだけ集めてみようと思うようになりまして、どんどん本が増えていく始末です。家人の扶養家族になりましてからは、本の購入に厳しい目が光り始めたのですが、さすが大連まではその目が届きませんし、それに本が安いのですから少しばかり籠が外れた状況になっていました。専家様の様子を家人に知らせるために写真を送ったのですが、書棚の部分はカットして送ったことであります。忘年会の写真は何気なく送って、美少女たちの背後に見える書棚をカットすることを忘れていましたので、今では私の道楽は暴露してしまして、今や口小言の雨霰であります。でも北京の瑠璃庁とか天津の古書肆のようなところで高価な古書を漁るのではありませんので、破産に追い込まれるようなことはありません。まことに可愛い道楽と申すべきであります。ともあれ今ではいくらか部屋の中に本の背扉が並んでいまして精神安定剤代りとなっています。それにしても中国の

今流の書物の表紙は毒々しいくらい原色の多い彩色刷でありまして、まことに色彩感豊かなことであります。

○いくらか生活が落着いて大連の街を平常心で見ることが出来るようになったのは、二ヶ月も経っていたでしょうか、大陸の早い秋も深まって大連名物のアカシヤの木も落葉している有様、徐先生に一度だけ大連図書館に連れて行っていたいたのですが、副館長という人の対応が極めて頑迷で、書庫の中にも入ってくれないばかりか、見たい本があったら申し出て欲しいというのです。目録もカードも不充分なのに、見たい本も何もないのであつて、少々ムカッ腹を立てて江戸時代の板本を見たいと申しますと、それでは調べておきましようという返事です。もうこれ以上押し問答しても仕様がありませんので、何とぞよろしくと最敬礼して帰ってきたことです。徐先生も仕様がないう感じでしたので、反応は期待しないでしたのでありますが、正に予期した通りでナシのツブテという有り様であります。大連の冬は早く訪れます、十一月の中旬にはシベリヤの寒気団が南下してきて一挙に零下十六度という朝があつて吃驚したのですが、確かそのころだったと思うのです

が、徐先生が息はずまず感じて近付いてこられて、図書館長の人事が内定して、新しい館長は友人なので何かと便宜をはかつてくれるでしょうという話です。国共内線を経て共産党政権が成立し、その後の文化大革命という大変動を経ていても、五千年の歴史を有する中国では、相変らず近代的組織よりは人脈で動くところが多いのだなと実感することが随所でありましたので、この話はいい話なのかと思つたことです。そして年が明けて春先のこと、まだ肌寒い時でしたが、徐先生が大連図書館に案内しますと御一緒にいただったのでした。館長の人事異動が実現したというのでしよう、張本義という方が新しい館長さんで、中国では書家としても有力な方なので、徐先生を大先輩だという表現しておられて随分親しい友人のようでした。口上は何時ものごとく素志を申し上げて、その後で書庫の拝観を申し出たのですが、快く申し出を受けていただけたのですが、今回は作戦を考えて今まで見せてもらえなかった最上階の書庫からと思い、実際に案内して下さる女司書の方に最上階からと申ししたのでした。何か電話連絡しておられました、例の副館長氏が同道という結果になって了いましたけれ

ど、とにかく最上階が開扉され、九層と八層の蔵書を拝見することが出来ました。ことに西本願寺大連別院の蔵書も併置されており、満鉄の資料群が大量に蔵されていました。中国の古典籍が櫛の箱に入って別置されており、中には日本板の漢籍も多く存し、宝の山という感じであります。新聞雑誌等の資料は、恐らく日本では見ることの出来ない旧植民地時代・旧満洲国時代の出版物だと思いますが、もう完璧に保存されている感じで、それらが正に五十数年の歴史の埃の堆積の中に埋もれて眠っています。これらは恐らく日本近代史・アジア近代史の研究には必須の研究資料群であることは間違いない、それがここに忘れ去られたごとくに眠っているのです。これらの歴史的資料群は、中国の人たちにとっては屈辱の資料群で忘却してしまいたいものかも知れませんが、決してそこから目を背けてはならないものであると思ったことです。現在の中国の人たちの思考方向を見ると、有史以来五千年の光輝ある歴史と一方的被害の歴史とに呪縛されている傾向があるけれど、たとえそれが屈辱の記憶であっても歴史的事実を正確に認識することが、新しい中国を創生することだと私は考えているのです。ましてや

日本人である私どもにとっては、決して忘却してはならない加害の事実を示す原資料群がここに眠っていると思われました。中国や朝鮮に対しては、今まで口先だけでも言える謝罪の言葉が表明されているのですが、それが口先だけと言うのは、相変らず為政者の時代錯誤的認識不足の発言が繰り返されて、日中友好にとって無用の摩擦を生じている今の日本の在り様が証明しています。それもこのような正確な原資料に基づく正確な加害の歴史が調査研究されていないからではないかなど考えますと、この大連図書館の膨大な資料群は極めて日本にとっても有用なものと思われるのでした。ともあれ大連訪問を始めて六年目、大連図書館に通うこと四回目にして、始めて大連図書館の奥の院に入ることが出来たのです、一冊一冊の本に触れることは出来ないながら、背文字に目を走らせながら、大連に来た甲斐があったとつぶやきながら、身ぶるいするような興奮に身を任せていました。日本に蟄居したままではとても体験できない研究者としての人間的営為が、大連流亡という決断によって実現したのだという自己満足もありました。大連渡航前の屈辱感と逡巡、大連渡航後一ヶ月余りの地獄の沙汰も雲散霧消の

思いがしたのでした。一つの宿願の達成です。この達成は、可能性を求めて、いまだ少しも姿を見せてくれない重友伝承の和本群を探究し続ける気力をも奮い起してくれるのでした。○どうにも止まらない牛の涎の大連往來であります。皆さんに伝えたい大連における私的体験譚は悲喜こもごもですが、まだまだ序の口という有様で予定枚数に達してしまいました。皆様に伝えたい事柄をここに列挙すると、(ア)生まれて初めての自炊生活、それも生活体験のない中国という異国で生起した数多くの珍譚奇譚、(イ)日本語教育という未経験の場で、中国人相手で演じた失敗譚、(ウ)中国の日本語教育のテキストに関しての私の発言に対する反応などの人間模様の諸相、(エ)寒空のもと大連高商の跡地探索に出かけて空振りに終った経緯など、(オ)鞍山・審陽・本溪・丹東の旅、上海・蘇州・杭州・無錫・南京の旅、北京の旅、ハルビン・吉林・長春の旅などの旅行記、(カ)教え子の大連慰問旅行記、(キ)長春の日本書籍探索旅行記(建國大学の蔵書が東北師範大学に移転していました、満鉄の蔵書は未公開でした)、(ク)『開卷驚奇俠客伝』の読書会開催の件、(ケ)九州大学の中野三敏氏を中心とする十六名の人の大連図書館訪問、(コ)国文学研究資

料館の松野館長等三名の大連図書館訪問、(伊大連外国語学院日本語学院に日本文化研究センター創設案提出の件などなどです。こうしたことどもに関しては、大連往来が統稿できるかぎりには皆様に報告することです。そして今度の大連再訪の主題である日本の書籍の探索と日本文化研究センター創設のことどもに関しても、統報できることを願っています。

注一、大連外国語学院から文教に留学した人で、私のところで奥の細道の論文を書いてくれました。副論文として『奥の細路』の漢訳をして提出して下さったので、拙著『奥の細道行脚』に付録として載せたことでした。大連外国語学院では『日本知識』という雑誌の編集責任者です。

注二、本当は再手術というのも恐ろしいことでありました。今度は脊椎の手術になるわけですから、今では絶対そういふことはなないと言いながら半身不随ということが発生しないとも限りませんし、成功したとしてもリハビリの苦痛をもう一度しなくてはならないと思うと、頭の中が真白になるのでした。手術の苦痛を経験したことがあると、その苦痛をもう一度体験してみようという勇氣は仲仲湧いてこないものです。人間の

弱さでしよう、いずれC型肝炎で発癌したら手術ということになるのでしょうか、本当は願ひ下げにしたいものです。

注三、中国では復古調なのでしょうが、清代以前の小説類を古代小説と称して次々と翻刻しています。どうもテキストクリステイックを十分するというのではなく、手当たり次第に翻刻しているようであります。丁度明治維新後に帝國文庫のような本が出版されたのと同じような風潮かなと思うことです。当然影印本もあるのですが、紙質が悪くて読みにくいものです。

注四、私の部屋には何故か美少女たちの出入りが多いと、年若い(と言っても四十年配の人たちですが)日本人教師にうらやましがられています。弁論大会出場者指導ということで大学側から押し付けられた学生たちが出入りしているのですが、それが男学生がいなくて美少女ばかりだと言うのです。これは、君たちが危険だから安全パイの私のところに配分されたのだと申しますと、その方が一層危険であると衆議一決、監視のためということもありまして、私の部屋には色んな人の出入りが多くなり、時に宴会ということになります。私にとっては

心なごむ中国の生活がそこにあるのです。

注五、二回目の大連行の時に目録とカードを見せたいいただいたのですが、まことに不十分千萬なもので、それを見ても仕様がなことが判っていました。昭和十四年までの収蔵本は、旧満鉄職員による目録が整備されているのですが、その目録と今の図書とが完全に一致しているのかどうかまだ判らないことですし、昭和十四年以後の収蔵本とか西本願寺大連別院の本などは未登録でしかうから、とにかく悉皆調査が必要なのであります。

注六、徐先生は何時も極めて冷静な方で、先生のこんな姿を見たことは始めてでした。

注七、徐先生も書家として有名な人で、その書は極めて正統的なもので、私の座右の銘である「実事求是」の書を書いていただいて、専家楼の壁間に掲げています。

注八、中国の人たちにも準未公開みたいで、調査されている形跡がないものですから、ついこんな不遜なことを考えてしまいうのです。高さんも結局二度と調査できなかったようです。

注九、どうも中国語がサツパリなので必然的に出無精になり、旅行も日本人教師の方々

の後について行くばかりです。結果的には極めて非自主的な旅行ばかりなのですが、それなりに浮んでくる感想は沢山あるので

す。

注十、徐先生から日本の文学を研究する組織を創設して欲しいとの依頼があり、文系基礎学の重要性を無視して、情報・国際・福祉・環境・人間などという二次的キーワードと語路合わせの組み合わせによる実学的学科を大いに奨励している日本の文教行政とは真反対の保守的研究組織という嘲笑があることは承知の上で、日本文化研究センターの組織案を提出して帰国したのでした。私の頭はどうひねっても保守的な学問体系しか浮んでこないようです。時代の流れから後れるのは当然ですネ。その案は次のようなものです。

研究施設設立趣意

一、名称（組織）

日本文化研究センター（仮称）

(一)古代文化研究部門

(二)近現代文化研究部門

二、趣旨

大連外国語学院日本語学院の教育目的である日本語を完全に身に付けさせるという目標を達成するためには、日本の文化がいかなるものであるかを理解し体得しなくては、教養性の高い日本語を修得することは不可能なので、日本語教育において中国で最も長い伝統を有する本院日本語学院において、その日本文化の実態を究明する研究センターを設立することは緊急の用務である。

ところで、文化というものは、高いところから低いところに影響し流れていくという特質を有しており、これが地球規模に於ける人間社会において地域の歴史的に顕著な現象である。日本文化に限定して見ると、日本の有史以来中国文明の高度な文化を模倣し摂取し再生して自己のものにしていくという文化現象が明治維新に至るまで千数百年間の長い間、鎖国状態にあった平安・江戸の両時代を含めて、絶えることなく、継続されて来ていたという現象がある。明治維新以後は、一転して欧米の文明が生み出した文化の模倣、摂取、再生による自己確立が企図されるに至り、それによって中

国の文化吸収によって成立した文化基盤の上に現在の先進国日本の文化が構築されるに至ったのである。明治維新以後の近現代においては、中国と日本との文化交流に逆転現象が生じていると思われ、それが中日の比較文化研究の特異点となっているようである。

このような複雑な文化交流関係を有する日本文化の実相を解明する機関を、かつて関東州であったという特異な歴史的背景を有し、今や中国の北の窓口として世界に雄飛しようとする大連の地に設立することは、極めて有意義であると思える。大連外国語学院日本語学院に設立される日本文化研究センターが、やがて中国に於ける日本文化研究の中心的存在となるのは、火を見るより明らかなことであろう。

三、具体的研究内容

(一)日本の漢詩文の比較文学的研究

(二)日本の散文における中国文学摂取の比較文学的研究

(三)日本近代文学が中国の近現代文学に及ぼした影響を追求する比較文学的研究

四、成果の発表

『日本文化研究』（仮称）創刊

年に一回もしくは二回研究論文を集めた研究誌を発行する。大連外国語学院日本語学院に所属する教職員はすべて投稿する権利を有するが、広く中国々内及び日本の研究者にも呼びかけて、日本語による研究誌（要約は中国語とする。日本人のものの要約は、要約された短文を日本語学院で翻訳する）として投稿をうながし、中国における日本文化研究のセンター的役割を果たすように努力する。